

# 書肆えん通信

No. 4

2016・12・08  
書肆えん  
秋田市新屋松美町  
5 - 6

私は石である

小野昭太郎

晩秋のある日、ほど良い陽光を受けてうつらうつらとし、太平の夢を食ろうとしていた私は、こつこつと脇腹のあたりを小突かれたと思うや、鉄槌のようなもので、ぐいとばかり掘り出されてしまった。私を掘り出したのは七十歳前後の男である。かくして私の小さな願望、来春までこの川原で仲間と一緒に食る惰眠の夢は消え去った。

私は真黒い一個の石である。永い遍歴の旅路の途中、その時たまたま住みついていた所は、猿ヶ石川の北上川との合流点近くの川原であった。私を掘り出した男は、水流のほとりまで私を持ち運び、たわしで私の体を洗い始めた。終ると私を持ち上げて横にしたり、立

私は石である 他 ……………小野昭太郎 1

てたりして見つめていたが、やがてどしんと私を放り出してどっかへ行ってしまった。洗われて川原にむき出しにされてしまった私だが、その背中に当る秋の陽光もそう悪くはない、このまま太平樂を決めこむことも出来そうだと思ったが、そうはいかなかった。さっきの男が戻って来て、私を手に取り先頃のように見つめ出した。そして又立ててじっと見ていたが、「……よし、連れて行こう」と言うや私を小脇に抱え、トラツクのところまで運び、新聞紙に包むと荷台の発泡スチロールの魚箱へ入れてしまった。

私はかくしてこの男性（以下私の主人ということになるが）によって、永遠とはいかなくとも、半永久的に猿ヶ石川の川原とは、別れることになったのである。主人の家まで運ばれた私は、翌日、更に水道水で洗われて軒下へと移されたが、驚いたことにそこには沢山の私の仲間がいた。私のように真黒いもの、蒼黒いもの、灰色、茶色、赤いもの、黄色いもの、肌のおつや

つやしたものの、ざらざらしたものの、山から掘り出されたりらしいもの、私のように川原から上げられて来たらしいもの等々、更に私と同郷のものも居るらしいことも解つて、気持ちは大分落ち付けることが出来た。しかもそれらの石は大分前から運び込まれたものらしい。いや何十年もなるものもあるらしい。青い日苔の

付いているものもある。どうも私の主人は大分「石ころ」が好きらしい。変つた人間もいるものだ。ところから私の主人の処にある石だが、どの石も私達石の仲間からすれば、変り物ばかりだ。尖っていたり、よじれていたたり、穴が空いていたり、水が溜っていたり、平べったい物等々。更に転がらないようにどっか平らな底を持っているもの、——特にこの恰好、底の平らな形というのは窮屈だから私は大嫌いだ、——。大体石というのは大山の岩脈とか、猊鼻溪の大岩壁のようなものは別として、大概のものは「ごろん」としたものが一般的であり、標準的なものだ。だから「ごろた石」とか、「石ころ」と言った言葉だつてあるのだ。なんの変哲もない「ごろん」とした形、それこそが石なのだ。その形であればこそ、いつでもどこへでもごろんと転がっては、安住の地を見出せるという利便性を持っているものなのだ。そんな俺達石ころ仲間の原点みたい

なものをさておいて、変つた石を集めて喜んで人間は、やっぱり変つてきているのだ。変つているから、変つた石を好んでいるのかもしれない。とすると変つた石と、変つた人間はどっかで結びつくものがあるのかな、いやそんなことは断じてないと石である私は思う。

そもそも石と人間では桁が違い過ぎる。お話にならない。ごろんとしてそこらに転がっている、いわゆる「石ころ」でも人間の一生の優に百倍も千倍もの長い間浮き世の風に吹かれて、存在しているものだからな。人間世界では、たかが百年も生きれば、長生きだと言つては金や物をくれたり貰つたりする。たかが百年でだぜ。しかも長生きと、金や物を結びつけて、てんとして愧じない発想そのものが実にくだらな。そんな程度の間が、しかも石の仲間からはみ出したような、変な石を集めては、やれ神韻だの、水景だの、山景だの、雲が湧き出すとか、風の音がするとか、言つては独りで悦に入っている様はどう見たつておかしい。だからそういう人間を石狂まがひというようになったのかもしれない。したがつてそういう人間に集められた石は、どう見たつて異形なんだから、彼等は川原の仲間に対しては大いに愧じるところがあると思うし、彼等は一刻も早く故郷の山川へ帰りたいと、猿ヶ石川

出身の私、真黒石は断言する。仲間よもつて瞑すべし。

さて、運び込まれて洗われ、軒下に放り出されていく私が、そんな石の怨念みたいな事を考えているとは露知らぬ主人は、所属している愛石会の展示会も終り、猫額にも足りぬ田圃の稲の収穫も終ってしまったのに、やたらと忙しそうに動き回っている。少しは落ち付いて、せっかく猿ヶ石川から連れて来た私のことにも、少しは関心を持っていいではないかと恨みがましくもなる。「石が語りかける」という言葉もあるそうだが、「語りかけた」とも対等に付き合ってくれなくては、語りようもないものだ。

そんなことで多少気持ち減入りそうになり、異郷の空の下、傾きかけた主人の家の軒下で、各地から集められた石の仲間と冬眠にでも入ろうかと思ひ始めていたら、私の意が主人に通じたのか、持ち出され洗い清められた。今度はそのまま放り出されずに、水を拭き取られ、ある部屋の中に持ち込まれた。主人が美石の研磨をしたり、作台をする小さな作業小屋である。部屋の中には私のように真黒い石や、蒼黒い石、研磨された美石など五、六個おかれてあり、台座をつけられることになっているらしい。私もその中の一個として、台座をつけられることになったのだ。というこ

とは、少くともどっかに飾られることになる、それは主人の家の中の片隅かもしれないし、又店の中かもしれないが、いずれにせよ今までのように、外に放り出される心配はまずないということだ。——だがさてよ、それを手放して喜んでもいいのか——という声が私のどこかでした。——お前はさつきまで理屈にならないような理屈をこねくり回して来たが、それは言っている、石の石たるゆえんは、そこらにごろんと転がっている」それがあるべき石の姿である、ということではなかったのか。もう一つ、お前は人間にもてられる石は、石の中の奇形児であり、そんな石は石の仲間ではあまり誉められた存在ではない、とも言ったのではなかったか。ところがお前が台座に乗せられて、飾られるとなると、この二つからはみ出すことになる。結局お前も石の仲間をはずれた、くだらぬ奴ということになるな。——ふーん参ったな、再び私の頭の中のどっかでそういう声が出たようだ。

まず、私が猿ヶ石川の川原から運ばれた時からして、「たんなる石ころ」であることに訣別することを、運命づけられてしまったかもしれない。しかしだからと言って、あの川原に転がっている無数の仲間のことは、片時も忘れたことはないし、あれが本当の石の姿であ

るといふ主張にはいささかの疑念もないし、あの川原を恋しがることも許されると思うのだ。

私は台座に乗せられることになった。私の台座は桂材である。最初は私を材料の上に立てて、およその大きさの見当を付けて、彫りきざみ、その穴に私を据えながら、周りや深さに合わせつつ更に彫り込み、私の全体の大きさに見合つて安定するぐらいに彫り込んだら、私を乗せて前後左右に動かして見て、倒れる心配のないことを確認して、彫り込みに沿つて、一、三ミリの縁取りをしながら外側を削り取つてゆき、足をも削り出した形で材料から作り出される。それからペーパーで周りを滑らかに仕上げ、好みの塗料で塗り上げられて出来る。その上に私がどつかと座るといふことになる。

さて私の姿であるが、みなさんの記憶には、私が主人によつて連れて来られる時のシーンが残っているとと思う。——私を立ててじつと見ていた——そう、だから私は立石なのである。高さ三十五センチ、前面広いところで十三センチ、背中までの厚さが六センチ、ぐらいといつたところか。前から見た姿は、人間が前で両手を軽く組み、顔をやや上げ気味に右に向けて、その視線は遙か彼方の遠い所に向けられているような形

なのである。ただこれだけでは私の全体像を思い浮かべることは難しいと思うが、あとはその人の石に対する経験におまかせする次第、悪しからず。

台座に乗せられた私に、主人は「思郷萬里」という銘をつけてくれた。そして配軸には「天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも」という和歌を色紙に書いて配することにしたのである。

私は肩の辺りが少し重くなったような気がした。主人が私を買ってくれることは有難いが、私には荷が重すぎるといふ気がするからだ。私の主人は私を養老元年（七一七）に吉備真備らと共に唐に渡つた遣唐使、阿倍仲麻呂になぞらえたのである。仲麻呂は大役を果たして帰国しようとしたが、いろいろ障害に出合つて帰れず、玄宗皇帝に仕えるなどして在唐五十有余年、遂に彼地に於いてその生涯を終えた人である。前掲の和歌はその仲麻呂が故郷奈良の都を偲んでうたったものと言われている。遙か東の空に満腔の意を馳せながら、その思いを果たせず、遂に大陸の土と化した彼の心境はいかばかりであつたらう。今をさかのぼること一二〇〇余年の昔のことである。なんと私の主人は、この私の姿にその仲麻呂の思いを垣間見たのかもしれない。

おかしなもので、そんな主人の気心が知れると、た  
いした取柄もない平々凡々の主人であるが、その意に  
沿うて私もその気にならなくてはと思うから妙なもので  
ある。もう川原の石仲間から白い目で見られようと、  
それだけにこだわってはいられないのだ。

私の主人が忙しそうに動き回り、急遽私を台座に乗  
せることにしたのは、実は訳があった。

陸前高田市に於いて、十一月下旬、市芸術文化協会  
創立二十五周年記念祭があり、その一イベントとして、  
東北水石展を開催するから、出展をするよう要請が



銘「滔滔」(第2回水石同好会展、  
2013年、秋田県立美術館)

あったのである。私の主人の属する水石同人会からは、  
最低十点以上出展して欲しいという協力要請があった。  
同人会としては代表を通して、各同人に呼びかけて、  
どうにか十一個を確保出来、それを私の主人がトラッ  
クに積んで、搬入、搬出をするということになったの  
である。主人はしきりに搬入、搬出当日の天候を気に  
していた。東北北部は十一月下旬となると、いつ降雪  
があってもおかしくないのである。更に奥羽山脈を越  
えるとなると、道路の積雪は大変である。その点太平  
洋岸は天候もよく、未だ暖かいのだが、山越えをして  
の搬入、搬出は時期的には心配される頃の石展であっ  
た。

私はなんと、この石展に、主人が去年気仙川から揚  
石した溜り形の水盤石、銘「翠円湖」と共に銘「思郷  
萬里」台座名、として出展されることになったのである。

陸前高田市での東北石展への搬入、搬出の日は幸い  
にも好天に恵まれた。勿論私も気分は悪くない。石展  
の会場は三ヶ所に別けられていて、私達は宮城県の仲  
間と一緒にすることになったが、あとで見回すと盛岡の  
石もあったのでまじり合っていたようだ。私達の部屋  
は三階であった。エレベーターの使用は出来なかつた  
ので、十一個の石を上げて飾りつけるには大変であつ



第1回水石同好会展（2012年、秋田県立美術館）

た。主人は幸いにも、いつも探石等と一緒に歩いている友人一人から同行してもらっていたので、大助かりだった。

ただ残念なことには会場は一石当りのスペースが少し狭かった。後の衝立も背が低く、軸をまともに下げることは出来なくて、上部を衝立の裏側へ曲げてやり、かろうじて色紙の文字が読みとれるようにして下げることが出来た。したがって配軸したものはほとんどなかった。私の場合は半ば右方に上げた顔の斜め上方に例の「天の原……」の軸を配したものの、前述したようなやり方しか出来なかつたので、そのふんい気が損なわれたことは否めなかつた。それでも会場を設営された方は精いっぱい努力をしたことだろう。厚くお礼申し上げる。

会場には私の言い分からすれば、異形の石、川原の仲間からすれば、相手にされないような石が、それぞれに自己主張をしていた。その数およそ百二十個。これがあの川原の無数の石仲間から、選び抜かれて可愛がられ、人間の生活に潤いを与えているのだろうか？私はまだ深く考えないことにした。前後入れると四日間、正味期間は二日の石展。私「思郷萬里」の前を何人の人間が通つたらう。そして又何人の人が私の真意

を知り得たろうか。私は立ちつくし黙して語らなかつた。

搬出の日には、主人に搬入時に同行した友人の外に、更にもう一人の仲間が加わり、三人で前日から探石も兼ねながら出掛けた。会場で更にもう一人の同人会員が加わったので計四名で収納をしたので、搬出は思ったより早く出来た。

トラックに積み込まれた私は、これで一二〇〇年の昔の歴史につらなる私の旅も終り、一路主人の家へ帰り着くものと思いきや、それは早計であった。主人らは午前中充分気仙川で探石をしたはずであったが、あきたらず、又別の川に入り探石を始めた。いくらなんでも異形の石の仲間は、そんなに転がっているとは思われないのだが、彼等は夢中なのである。私の傍にはまた無惨にも太平の夢を破られたらしい、私の仲間が二、三個揚げられたようだ。

多少陽光が翳りはじめた頃、トラックは、私の主人の運転によってようやく帰路についた。トラックの荷台で、あちこち揺れながら、私はいつしか猿ヶ石川の川原でゴロゴロしている仲間と、一緒にいる夢を見ていた。

私は一個の真黒い石である。主人と出会い拾われて

からの、一瞬の光芒にも満たない時の流れを、私なりの感覚で捉えて見たことの記述である。妄言多謝。

(一九九七、一月)



銘「聽雪」(秋田県名石展、2014年、秋田市文化会館)



自作漢詩「暮春有感」の前にて筆者。書は美郷町・高橋峰晋氏（秋田県美術展、2010年、アトリオン）

## 雪中老人妄言

小野昭太郎

「文学探求」三九五号を一読して、皆さんの昨年末の選挙に対する感想と決意を聞き、感銘を受けました。変らざる皆さんの革新に対する情熱に敬意を表します。昨年末の選挙結果に対する私の感想は、ほぼ皆さんのそれと同じです。当時は情けない結果であると慷慨したのだが今では少しく違っています。皆さんの記事に触発されて、一筆書いてみます。

曰く、「マスコミは真実を報道しない」。

曰く、「民主党が国民を裏切った」。曰く、「外国の国境侵犯があった」。曰く、「国民の自覚が足りない」。曰く、「会社のしめ付がひどかった」。等々、しかしそれで結果を弁解することは出来ない。改憲、軍拡派の三分の二以上は、冷厳な現実として登場したのである。選挙運動で痛感したのは、改憲政党に対する、護憲側の一つの極として共産党の運動を見れば（私の見ている範囲の秋田でのことになる）、圧倒的に宣伝が足

りない。選挙の期日は前もって、予測されているのだから、もつとチラシなり、宣伝カーなどその政策を国民に訴えなければならぬと思う。赤旗を配る人も「宜しく」ということもない、国道七号線沿いに住んでいる私は、宣伝カーの声も聞かない。それに候補者が共産党員しか知らない人を立てたのでは、当選はおろか投票増も期待できないのではないか。

かつて共産党員が当選した頃、各地に革新市長、革新の知事が出現した頃は共産党の運動も活発で、元気があったようだが、今は何をやっているのかさっぱり解らない。党員が老化したのか、物わかりが良くなったのか、労働運動の低下によるものか。とにかく、共産党の政策について国民はよく知らないのではないか（秋田の現状を見てのことである）。左、右と仕分するのはよくないが、左の極がこれであるとすれば、他はおして知るべしである。

共産党嫌いになったとか、駄目だと言っているのではない、もつと伸びてもらいたいから言うのである。

自民党の議員の大部分は戦後生れで、戦争を知らないのに、さかんに集団自衛権云々とか、国防軍云々とやっていることも書かれている。私もそれは横着であり、おこがましいと思うが、実際に太平洋戦争で、軍

隊を体験した人で、表面では軍隊は駄目だと言いつつも、心底からそれを否定するという、ニュアンスを感じとる人が案外少いという感触を、私は私の周囲から感じとることが、あったし、今もある。その人の所属した軍隊にもよると思うが、それだけ庶民の生活が貧しかったことにもよると思うが違和感をもつ。そこから見えてくるのは、戦争を知らない人が、軍拡をおおることは大いにあり得るといふ答が出てくるということにもなる。

さて、私の友人に一人の僧侶がいた。親鸞を祖とする宗派に属する人である。若い頃、彼の本堂を借りて、いわゆる「マルクス・レーニン主義」の学習会を持つことがあった。時には彼も参加して、大いに論じたものであった。数年前他界したが、彼が逝去する前に会った時、こういうことを言っていた、釈迦の教えは「すべてをあるがままに認める」ということに尽きると。その時は、彼も年老いて変わったな—ぐらいにしか思わなかったが、東日本大震災、原発の是非をめぐる人々の動き、改憲の動きに対する人々の反応などを見ると、釈迦の弟子となっただけに、彼の言った「あるがままを認める」ということが理解出来るような気がしている。

それは「現状を是認する」ことではないのだということだ。

人々はなぜ、私も含めて戦争に突入していったのだろうか。

軍、政、官、一体の暴政の中で、それは抵抗するすべも無く、進められていった、と言われているが、それだけではあるまい。人々の中に、戦争政策に迎合するものがあつたのではないかと思う。いろいろな要因があるとしても。

いつの時代になつても、すべての人がそれぞれに満足な生活することは、不可能と思う。なぜなら人も自然界の一部であり、その自然は生流転して、止む時がないからである。人の社会もまた然り、栄枯盛衰を繰り返す。その中の人々の生活である。大げさに言えば千差万別があつて当り前ということになろう。

いま仮に、その人の能力に応じて働き、その働きに応じて報酬を受け取ることが出来る、しかも子供は子供なりに、老後は老後として保障される社会が、出来たとした場合、人々は果たしてその社会に安住するだろうか。私は必ずやその社会に応じた不満が生じて、それを変えようとする運動が形成されていくと思う。それが人間であり、自然の有り様なのではないか。な

にかが破綻し、別のなにかがその跡を埋めていく、いわゆる流転である。

古来、すばらしい善政を敷いた王朝もあった。又理想と思われる政治を行った政治家もおったようだが、ことごとく亡び去った。それらは何を物語るのだろうか。事の発端が天変地異にあったとしても。

ひるがえって今回の選挙を見てみよう。改憲、原発容認派が大勝である。かたわらに原発事故で流浪する人々がおり、いまだに沖繩の人々が太平洋戦争の苦しみを負って、苦しんでいる、のにもかかわらずである。前にもあげたが理由はいろいろと考えられようが、結果として事実認めなければならぬ。国民がその道を選んだのである。この流れからすると、参議院選も改憲派が勝利するのではないかと思う。そのことを是認する気は毛頭ないが、長い人間の歴史の中で、その時の流れとして、その先に戦争があるとしても認識出来なかつたり、抵抗出来なかつたりして入り込んで行くことがあるのではないか。かくして人の世は興亡を繰り返していく。是非を言うことはたやすいが、その流れは止められることもあるが、とめられないこともある、人が自然の一部であるかぎり。

そういう言い方は、結局成り行きにまかせるとい

ことではないかと言われるかもしれないし、結果としてはそういうことになるかもしれないが、是非をわきまえて、常に是の流れに人々を向かわせるということ、人間がその欲望や、感性を、理性をもって制御するようにならないかぎり、望むことは出来ないのではないかと思う。そこにまた自然と人間との関係が出てくると思うが、よく説明することは難しい。自然は変化するのに、人は変化しないことはない。自然にならなかつた完璧なものはないのに、人だけが完全といふことはないということになるのだろうか。

思いつきで、支離滅裂なことを書いたが、私としては結果はどうあれ、反戦、平和、護憲の側で、驚馬に鞭打って、出来得るかぎりのことはやるし、やっている。理由はない。八十年の人の世の中の生活の中からつかんだ生き方として、その道をとるだけである。事の成否にはあまり関心がない。要は「現実があるがままに見て」そこから選択した方向であるとも言えよう。そのことはとりもなおさず、自分とは相反する道を選んで生きていく人も、当然あり得るということでもある。年老いたせいか、そういう生き方の人を護憲側に引き入れたいと思う願望はあつても行動する体力はもう無い。残念であるが、そういう状態で、人、一

人の終焉が来ると思っている。

しばらくぶりでこういう文章を書いた。

いつも私が疑問に思っている、苦しい軍隊を経験して来た人が、必ずしも軍隊を否定しないのはなぜか、戦争の惨禍が未だに残っているのに、なぜ、改憲、原発容認が国民の中に根強く存在するのか、ということへの愚考である。

「物事を深く考えないからである。とすればそれで終るが」

(二〇一三、二月中旬、妄言多謝)

\*「文学探究」とは、国鉄の作家集団で時々発行している仲間の通信紙みたいなもので、拙稿は、投稿したが没になった。

## 「寝て居て人を起こすこと勿れ」の周辺

小野昭太郎

芙美子さん、お手紙ありがとう。

同封されていた石川理紀之助翁の記事を読みました。「寝て居て人を起こすこと勿れ」とは小さい時からよく聞かされた言葉です。

私達の通学していた金足西小学校の講堂には、石川翁と佐藤信淵、平田篤胤の大きな写真が飾られています。

私は小学校高等科二年（今の中学二年生）の時に、石川翁の住んでいたという草木谷の近くの道場で、南秋田郡（当時金足村は南秋田郡）の各小学校から選抜された者、三十名ぐらいだったと思うが、一週間ほど宿泊しての集団生活を送った経験があります。

毎日なにをしたか記憶は定かではないが、集団での行進とか田畑の農作業の生活であったと思います。

一週間がずい分長いと思ったものでした。

板の間での寝起きでした。石川翁の質素な生活を实地で学ぶということにあったと思うが、ねらうところ

は別で、青少年の軍隊生活への適応対策の一環であったのではないかと思っています。

質素（切りつめた）生活で貧乏な家を盛りかえし、村を豊かにする為に勤勉に働くこと、それ自体はよい事だと思えます。

「寝て居て人を起こすこと勿れ」を美美子さんはどう理解されたかわかりませんが、よい言葉も実行されなければ単なる一つの言葉にすぎません。石川翁は当時の農民の貧乏な生活を良くする為には、生活は質素に一所懸命に働くことによって改善するということを考え、自分でもそういう生活に入ったようです。

当時の農家はほとんど大地主の小作人（田畑を地主から借りて、耕作をし年間定められた金や物を収める）であった。石川翁の実家も金足の大地主、小泉の奈良家の別家であったと思う。したがって石川翁は当時の地主对小作人の関係は熟知していたはずである。地主が小作料を引き下げれば、いくらかでも農民の生活をよくすることが出来たと思うが、彼がその辺をどう考えていたかは解らない。

性格的に質素勤勉を多とする人とも思われますが、当時の農民（百姓）を不誠実、怠惰であると見ていたのではないかという気もします。

農民が不誠実で怠けているようになったとすれば、それは長年にわたる為政者による「生かさず、殺さず」という政策によるものだとすることを翁はどうとらえていたか。

ちなみに私の家の田畑はみな小泉の奈良家の小作地でした。秋の収穫後雪の降ってくる頃、父達が米俵を荷車に積んで奈良家の庫に運び込むのを見、なぜ米を持つていくのか訝った記憶があります。

一所懸命に働いて家庭生活を守り、結果として村（社会）が豊かになることは好ましいことだが、そういうふうにはいかないのが現実です。ということは個人個人の努力には限界があって時の政治によって左右されるからです。したがってわれわれ庶民の生活が豊かになるには、個人の努力プラス「良い政治」が行われなければなりません。

戦後、私達昭和一桁生れは生活を守るために、又経済復興ということで、「寝て居て人を起こすこと」なく朝は暗い中から田畑で働き、日中は工場で働き、勤務を終って帰ってから、また日が暮れるまで働いた。我が家に明日食べる米が無い時にです。それこそ石川翁の説く質素勤勉を地で行く生活をしました。

そうせざるを得なかった状況下にあったとしても。

その結果がどうなったかと言えば、その努力の甲斐があったのかどうか生活水準は確かに上がったが、社会全体が豊かになったかと言えばそうだとはいえないと思う。

① 農家は急速に無くなりつつある。

② 就職が出来ない。出来たとしても格差がひどく、リストラと隣り合せである。

③ 中小企業は常に倒産の危険にさらされている。

片一方では、公共事業と称して不急不要の事業が大々的に行われている。税金に維持されながら生産には何ら寄与しない軍備が年々増強されている、等々を見れば歴然としています。

「寝て居て人を起こすこと勿れ」と自から窮乏生活に入った石川翁は大正四年に亡くなっているようです。日露戦争などは経験しているはずだが、翁が戦争に対してどう考えていたかはよく解らない。でもその言動から推察するに「国の為に死すること」「天皇の為に身を捧げること」は是認したと思われる。

太平洋戦争まで生きていたらどういふ対処をしたであらうかと思うが、反戦とは遠い存在であったと思う。

私は人物を評価する時にまず考えるのは、その人が戦争に対してどう対処したかを見ます。戦争を起こす

人は皆「正義の為」「国民のため」「国を守るためやむにやまらず」などと言います。「不正義の戦争である」とか「侵略戦争である」などは、口が割かれても言いません。これは古今東西みな同じです。だがどういふ口実をつけようとも、戦争ほど悪いことはないと思います。

私が小学の頃は「欲しがりません勝つまでは」「贅沢は敵だ」などと言った言葉が流行した時代、質素勤勉の生活の「すべて」が「聖戦遂行の為」に利用されていった。石川翁の勧める耐乏生活は「国民からすべてを奪って戦争につき込む」為政者にとつては最適の道であったのです。それは翁の志す処と相違つていたとしても、戦前、戦中、戦後を生きて来た私はそういうことで石川翁という人にはあまり好感をもつてはいません。

余談になりますが、秋田に関わる画人に藤田嗣治という人がいます。新しく作られた県立美術館に大作を飾り、県や市で宣伝にこれとめていますが、私は好感をもてない人です。藤田嗣治と横山大観という人は、戦争を描き、戦争に国民を駆りたてる為に奮闘をした（大観は隊長、藤田は副隊長）人だからです。藤田は戦争に敗けるとフランスに去りました。戦争協力につ

いてどういう態度をとったかはよくわからないが、反省するところはなかったようです。日本に帰ることはなかった。

横山大観についても戦争協力についてはどうしたのか、田舎者の私にはわからない。

そんなことで二人の絵は名画と言われようが、人格的に好きになれない画人です。

私は今も思います。「なぜ日本は侵略戦争」へと突き進んでいったのだろうか。私のような少年は戦争は悪いものだと思うこともなく、ましてこの戦争が侵略戦争であるなどとは夢にも思わなかった。父親がお互いに殺し合う戦地へ送られていても。そのような教育をされていたからです。その中の「質素」であり、「勤勉」であったのです。

政治権力とは恐しいものです。

でも大人にはこの戦争は悪い侵略戦争であることを知っていた人もおったはずです。ですから国民が「戦争はいやだ、やめろ」という声を出さなかったから、戦争にのめり込んで行ったのではないでしょうか。

「個人の倅せを追求すること」「自分の言いたいことは言う」ことは国民の団結を阻害する、利敵行為とし

て弾圧されました。弾圧は権力をもっている者が都合悪くなると行う常套手段です。弾圧に抗するには権力の横暴に反対する人々が連帯して闘わなければならぬと思います。

戦後七〇年、為政者に国民の声を聞かずに自分達の政治権力を優先させて、意図する方向に引き込もうとする匂いがしてきました。

日本が武力に依らない平和を追求し、紛争にかかわらないよう中立な立場、人の道を踏み外さないよう立場を堅持するならば、外国は日本と事を起こすような愚かな事はしなむと思う。

時の為政者が仮想敵国を作り上げ、脅威をおおる時には、陰になにかが隠されていることを疑い、流されてくる情報は多分に真実でないことがあるということを知り、頭に入れおく必要があります。

「寝て居て人を起こすこと勿れ」から入りいろいろと書いてしまった。太平洋戦争を少しでも経験した者として、日本では三百万人、アジア全体では二千万人という人々の犠牲を基に成り立っている「平和憲法」を守り、「戦争は駄目だ」という声を大きくしなければならぬと思う昨今です。

それは一人一人の生活を守り、豊かにする闘いでもあります。

(二〇一五年十一月十四日、雨の日)

\*これは群馬県に住んでいる孫娘が、群馬新聞に半ページにわたって掲載された名言としての「寝て居て人を起こすこと勿れ」の記事を、おじいさんは秋田県の人だから読んでください、と言って送ってくれた。それを読んだの孫娘への返答である。若干、後で筆を加えてある。孫娘の名前は仮名である。

(二〇一六、十月)



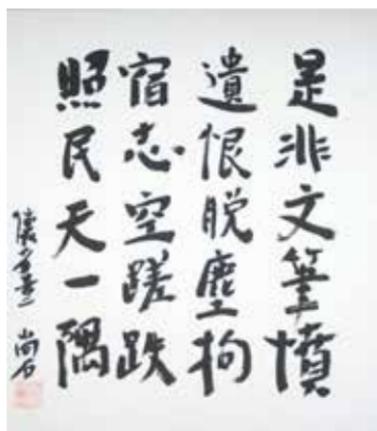
銘「天籟爽韻」(第3回水石同好会展、2014年、秋田県立美術館)

### 【後記】

小野昭太郎さんには、吉田朗さんの紹介でお会いし、その後、十冊近く本を作らせてもらった。オールラウンドで、揺るがない叡知にはいつも啓発されているが、その一端をここで紹介した。

石については、展示会で写真を撮っているので、その中から載せた。

漢詩は、小野さんによって、少しは身近なものになったが、残念ながら、実作には手がとどかない。また、中国語で読みたいという試みも頓挫している。あせることはないのだろうか…。



写真は、秋田県多喜二祭のために書かれた色紙である。

(J)